



いもうと温泉！

橘 真児

illustration ◎ごまさとし

美少女文庫
FRANCE  SHOIN

赤く染まったほっぺたに、潤んだ瞳。あどけなさのなかに潜んだ色っぽさに、言葉を失う。

「——え、なにを？」

間をはずした問いかえしに、沙由美も返答につまった。けれど思いきったふうには、ピクに艶めく唇を開き、

「ゆうべのつづき——」

それだけ口にして、「やん」と恥じらう。もちろんなんのこともかなくて、考えるまでもない。

（つづきって……アナルセックス!?)

それともノーマルなほうなのか。どっちにしろ、こんなところでいいような行為ではない。

（ホント、女の子ってわかんないや）

間接キス程度で恥じらいをあらわにしたと思ったら、今度は大胆な要請。万華鏡で覗いた景色みたいにくるくると変わって、つかみどころがない。

「ここですの？」

「うん」

「今!？」

「そうだけど……ダメ？」

「いや、でも、どうせ今夜は沙由美ちゃんと——」

「それは今夜のぶんでしょ？ わたしが言ってるのは昨日のぶん。ううん、先週全然できなかったぶん」

健太のロリコン疑惑が晴れて安心し、それで欲しくなったのだろうか。ともあれ、期待に輝く瞳はすっかりその気モードになっており、今にもパンティを脱ぎだしそうな気配すらある。

「いや、でも……」

健太が逡巡したのは、いくら屋上とはいえ、ここが校内であるからだ。たしかに初めて沙由美の性器を目にし、そこに舌をつけたのはこの場所である。しかし、今の彼女が求めているのは、それ以上に肉欲にまみれた行為。

「ね、お願い、健兄ちゃん」

ただおねだりするだけでは埒が明かないと思ったのか、沙由美はいきなり抱きついてきた。そうして年上の少年の唇を奪う。

「う——」

ほんのりサラダドレッシングの風味がする少女の唇は、ぷにぷにして柔らかか。はずむ吐息も甘酸っぱい。冬の制服の上からでも明らかな、女らしさをみっちりつめこん

だ肉体で密着されれば、若い情熱はたちまち反応する。

（あんなことまでしたのに、おれもゆうべは精液を出さなかったんだよな）

そんなことを考えるなり、股間のモノが血液を集め、膨張をはじめた。それがしなやかな手指でくるみこまれる。

「ほら、健兄ちゃんの、こんなに元気になってる」

いったん唇をはずして悪戯^{いたずら}っぽい目で笑い、沙由美はズボン越しに牡の高まりを愛撫しながら、またくちづけを求めた。

（ええい、どうにでもなれ）

健太も彼女の背中に手をまわし、柔らかな身体を抱きしめた。舌先でチロチロとくすぐり合うキスを交わしながら、下降させた手でスカートからはみだした太腿を撫でる。やはり寒いのか、そこはひんやりしてわずかに鳥肌が立っていた。

（こんなところじゃ、脱ぐわけにもいかないな）

肌を晒すのは最小限。着衣のまま結ばれるしかないだろう。それもなかなかこそそられるシチュエーションではある。

沙由美の手がファスナーをおろし、内部に侵入してくる。健太の手もスカートの奥、薄い下着に守られたところを探った。そちらはいくらか体温を保っており、コットンに包まれたぷりっとした尻肉を揉んでやると、悩ましげに身をくねらせる。

トランクス越しの愛撫で、ペニスは完全にそそり立って先露をこぼす。そして少女の中心も、蒸れたように熱くなった。

「ン——はあん」

クロッチの食いこんだわれめをなぞられ、沙由美が腰から下をワナワナと震わせる。「沙由美ちゃんのここ、もう熱くなってる」

感動をこめて告げると、「ヤダあ」と泣きべそ声があがった。

「健兄ちゃんのだってえ」

苦勞して前開きからつかみだされた肉根は、冷えた外気に晒されても熱を失わず、雄々しく脈打った。

「ああ、こんなにおつきくなってる」

欲しくてたまらないという、情愛のこもった手つきでしごかれる。健太も息をはずませ、腰をよじった。

「ね、ちよつと待って。パンツ脱ぐから」

矢も楯もたまらずというふうに、一度身を離れた沙由美はスカートの下に手を入れ、純白のパンティを脱ぎおろした。小さく丸まったものをポケットに入れてから、出っぱりに腰かけた健太の膝を、向かい合ってまたぐ。これでふたりとも性器は丸見え。互いの中心に手を伸ばし、快感を与え合う。

「健兄ちゃんのオチンメン、すごいよ。硬くなって、お汁もいっぱいこぼしてる」

「沙由美ちゃんのだって。ほら、クチュクチュいってる」

「やあん。だって、健兄ちゃんの指が気持ちいいんだもん」

指を相手の吐液で濡らし、そのヌメリを利用して敏感な部位を責める。健太はクリトリスを、沙由美は頭部の粘膜とくびれを。

「ああ、あ、クリちゃん感じる」

「沙由美ちゃんもじょうずだよ。気持ちよくて、もうイッちゃいそうだ」

「やんやん、まだダメなのお」

駄々をこねた沙由美が、屹立の根元をギュッと握る。息づかいを荒くしながら、健太にくちづけた。

ちゅばちゅばと吸いねぶる激しいキスで、いつそう情欲の焰ほむらを燃えあがらせる。制服姿のふたりは、もはや肉体を深く結びつけずにはいられないというところまで高まっていた。

「これ、どっちに挿いれたいの？」

唾液に濡らされた口で急いで問いかけると、沙由美はちよつと考えてから、

「えと、最初はアソコで」

答えてから、ポツと頬を染める。最終的にアヌスに受け入れるにせよ、まずはよく

濡らしてからと考えたのだろう。ならばと、そのまま対面座位で結合しようとしたものの、健太は壁を背にしているから、うまくいきそうにない。

「沙由美ちゃん、こっちにお尻を向けて」

健太に言われて、彼女もすぐにどうすべきか悟ったらしい。まわれ右をして、スカートを腰までめくりあげた。

あらわになる、ぷりんと愛らしいヒップ。最初の頃より肉づきがよくなったかに見えるのは、おそらく気のせいではないのだろう。セックスをすることで、少女の肉体が女として開花してきたのだ。

健太は脚を大きく開き、そのあいだに沙由美を迎え入れた。彼女には結合する部分が見えないから、ここは自分がリードするしかない。

「もうちょっとお尻を上向きにして……うん、そのまま後ろに」

やはり見えないから不安なのか、沙由美はへっぴり腰のおっかなびつくりで後ろにさがる。それでも健太に臀部を開かれ、ペニスの先端がわれめに食いこむと、艶めく尻肌を期待でブルツと震わせた。

「いいよ。このままさがってごらん」

逆ハート型の丸みがそろそろと距離をつめてくる。亀頭が恥裂を押しひろげ、粘膜同士が密着する。

(ああ、温かい)

早く全体を包みたいと気が逸る。筋張った棹を握って角度を調節し、先端が入り口をとらえるなり、たつぷりと潤滑されていたおかげで、頭部の半分近くまでがやすやすと蜜窟に呑みこまれた。

「あ、入ってくるう」

制服の背中がわずかに弓なりになる。桃尻にパァッと鳥肌がひろがった。もう大丈夫だろうと、健太は沙由美の腰をつかむと、一気に引き寄せた。

「はあああッ！」

感に堪えない悲鳴があがった。硬直が少女の膣を貫き、熱さと締めつけを浴びる。

(あ、気持ちいい——)

ストレートな感動がこみあげる。ペニスが柔襪に包まれて快いばかりではない。彼女とひとつになれたという、心情的な喜びもある。

健太は沙由美の upper body を起こさせると、後ろから抱きしめた。制服越しに、たわなに育った乳房を揉む。

「あ、健兄ちゃん」

はふはふと吐息をはずませ、少女が尻をくねらせる。せっかく挿入した肉茎が抜けそうになり、健太は腰を反らせて膣奥を突いた。

